

長谷川四郎全集
第五卷

文庫

長谷川四郎全集第五卷

一九七六年九月五日印刷

一九七六年九月一〇日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

振替東京六一二二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七六年(検印廃止) 落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集
第五卷



長谷川四郎全集

第五卷

晶文社



1 通り過ぎる者

上陸した火夫

11

時計物語

44

下宿人

85

2

登山帽の男

121

細部の拡大

170

尋ね人

197

3

菅生事件ノート

211

菅生事件現地調査に参加して

椅子の上のビールビン

245

241

- 平山三郎『夜の周辺』 253
- 多田裕計『アジアの砂』 254
- ぼくの好きな文章 255
- ヴォートカの周囲 257
- きだ・みのる『日本文化の根底に潜むもの』 259
- 野間宏『地の翼』(上) 260
- 楽泉園のロシヤ人 262
- 一つの感想 264
- 金達寿への手紙 金達寿『日本の冬』 265
- 夏休みに読みたい本(アンケート) 268
- SOPHISTICATED 268
- 『記録芸術の会月報』から 270
- 「記録芸術の会」成立までの経過報告 芸術運動をはばむガンはなにか(アンケート) オールド・ボーイと
 ヤンガー・ジェネレーション(アンケート) わたし記録 事実と解釈 報告と意見 ナンセンス・パレエ
 ドゥゼーンツェフ『パンのみによるにあらず』 276
- 秘境ものをさぐる 277
- 『生活と文学』その後 280
- 白夜を見る 281

花田清輝『大衆のエネルギー』 284

『尋問』解説 287

バカさわぎの中で 293

へ二頁作家論へ安部公房 295

アンリ・アレック 296

佐々木基一『革命と芸術』『現代の映画』 300

日の丸と君が代 301

コラムへ青赤黄へ 303

国葬 ファン 李珍宇 発砲

へわたしの古典へ ロシヤとドイツと 306

「警職法改正」について（アンケート） 308

未知数のカクテル 308

『サレムの魔女』 311

佐藤一『被告』 315

未だ「事」起きず 316

国民文化集會に参加して 317

菅原克己について 322

作者のノート・5
解題 福島紀幸

335

325

1

通り過ぎる者

上陸した火夫

西田実が初めて、偶然のようにその町へやってきた。かれがボイラーに石炭をやっていた青煙突の貨物船が、夜があけてみると、そこへ入っていて、もう荷役をやっているのだった。起重機がうごいて、船艙から四角い大きな木函を次々とおろしている一方、苦力たちがふくれた麻袋をかついでタラップをのぼり、船艙に積みこみつつあった。西田実はこの船にこれで半年くらい乗っていたのだが、一度も上陸したことがなかった。航海ごとに海のむこうからいろんな町が忽然と現われた。かれはそれらを船からながめただけだった。船が沖に投錨して、水がきれいだったりすると、かれはロープをつたわって海へ入り、泳いだりしたくらいのものであった。ケチな野郎だ、とかれは思われていた。給料がこうしてそっくり貯っていたからだ。食うものは、バケツに入ったシチュウと、それから塩からいパンならいくらでもありつくことができたとし、労働は裸体でもできた。ところで西田実は、この町で上陸する気になった。甲板から町をみているうちに、しばらくぶりで生れ故郷へいってみようかと思いついたからである。で、かれは

船底へおりと、そこで碇泊中の閑散なボイラーに最後の石炭をほうりこみ、ショベルを定位置にたてかけて、さて、こざっぱりした服に着換えて帽子をかぶり、垂直な鉄の梯子をのぼっていった。こうして上甲板の事務室へ到達したかれは、そこで半年分の給料をポケットにねじこむと、そのまま、からっぽの麻袋を肩にタラップをくだる苦力たちと一しょに下船したのである。下船というよりも、脱船だったが、機関長がうしろから笑いながら、かれを見送って、おまえ、上陸して何をやるつもりかね、と言っていた。西田実は、これまた笑いながらふりむいて、魚釣りでもやりますよ、と言った。それから通りすがりのサンパンを呼びとめた。

小さな木製の棧橋から頭を出し、やがて全身を現わした西田実のまず眺めやったものは、ならんでいる倉庫のあいだにはさまって、ところどころ、船会社や船具店の立っている波止場通りで、そこには海の方から吹いている微風に、薫くさい土埃りが小さな渦をまいていた。地面には磨り減った大きな、黒ずんだ石がしき

つめられていて、その上で荷馬車とトラックがいきちがっていた。ひとびとが右往左往して、なにやらわからない言葉を叫んでいた。むこうの方からやってきた電車が停つていて、ここが終点らしく、乗客たちはみんなぞろぞろおりてきたが、みんな大きな袍をぶらさげて、近くの岸壁で待っている白い客船の方へいそいでゆくのがみえた。給料でポケットが少しふくらんでいるだけで、荷物を一つももっていない西田実は、そこらの勤め人かなんそのようにこの波止場通りをよこぎって、いま電車のやってきた方へ街路を歩いていった。こうして、適当なところで、停車場のありかをたずね、汽車にのりこもうと思つたわけだった。汽車にのり、船にのり、それからまた汽車にのり、そしておりたところにかれの生れた町があるはずだったが、それがどんな様子をしているか、いつてみなければわからないことだった。

農産物仲買人の事務所だとか保険会社だとかサルベージ出張所だとか運送屋だとか、ごちんまりした料理店などが両側に並んでいるその街路は、わりと人通りが少なく、ひとびとは話をしながら悠々と電車の前を横切つていた。西田実はずたずたとその歩道を歩いてゆき、やがて広場へ出た。

この広場は円形のかなり大きなもので、周囲にはいかめしい建物がならんでいた。それらは銀行やホテルや警察署や官庁や、また貸事務所の細胞でできた大きなビルディングのようだった。西田実は外観からそのように判断したわけだったが、かれが広場へ入つていったとき、どこからか時刻を鳴らす大時計の音が聞えて

きた。かれはあたりを見廻してみても、広場を囲んでいる建物のうち、いちばん古ぼけて、時代おくれな尖塔なんかをくつつけている煉瓦作りから、その時報が聞えてくるのを知った。それというのも、円形の白い大時計がその尖塔にくつついていたからだ。大時計の針は一時を十七分ほど過ぎていたが、一方、時報の方はゼンマイが狂つたように幾つも鳴りつづけ、それから突然やんだ。あれが官庁の建物にちがいない、と西田実は思った。時報の音がやみ、電車も一瞬とだえたとき、かれのやってきたうしろの方から汽笛が一つ聞えた。それから起重機のうごいてる音、というよりも空気のかすかに振動しているような気配がした。かれがふりむいてみると、その街路の奥には一面にも、やのようなものがたちこめていて、海や船は一つも見えず、ただその中における人々の労働が漠然と、感ぜられるだけだった。さっきまでかれの住んでいたところが、ここからはもう別世界のようになっているのだ。西田実はいかにも小市民好みにきれいに手入れのゆきとどいた芝生のあいだの砂利路をふんで、広場の中心まで行つてみた。そこには馬にまたがった一人の英雄らしい人物の銅像が白い花崗岩の台座の上に立つていた。それは日露戦争の将軍かなにかにちがいがなかった。そしてその場所からみると、広場から幾本かの街路が放射状に出ているのがわかった。で、かれはまた歩きだした。でたらめに、足のむく方へ、というのは、時間はまたたつぷりあったし、どこかそこいらで食事でもとろうと思つたからである。特に空腹ではなかったが、いわば楽しみに少しばかり食べようと

思ったわけだった。それに、かれ自身ははつきり意識しなかったが、かたい土の上の、そのまた舗装路の上を歩くことが、海からあがってきたかれの足を少しばかり疲れさせていた。足のむく方へ、といっても、広い街路ではなく、それは自然と、小さな路地へ向っていった。というのは、そこにはかれみたいな人間が少し食べたりするのにふさわしい、簡単な食堂があるはずだと思われ、すでにかれの眼には、その店の看板が道ばたに見えたような気がしたからである。果して、路地を少しいったところの左側に、路面にいきなりセメントの壁面が立っていて、それにははげかかった赤ペンキで中央飯店と書いてあった。中央とはいうけれども、それは片隅の、小さな、みすばらしいものだった。こういうところが必ずしもやすいとはかぎらないけれども、少なくともそこでは落着いて食事ができるような気が、かれはしていた。西田実たちはちどると、その家の扉をぐいとひき、そしてそれが閉ざされると同時に、道路から姿を消してしまった。

中央飯店は、入ってみると階下がわりと広く、食堂になっていた、それから二階へゆく階段が隅っこの方についていた。西田実が入っていったとき、そこには客が一人もいなかった。壁の時計が三時を報じていたが、ここでもそれは狂っていて、針は十時を示しているのだった。奥の勘定台のむこうで、それまで下をむいてなにやら書いていた主人が顔をあげて、一瞬、げげんそうな表情でかれを見た。西田実は見慣れない人物だったから、通りすがりの客のようでもあったが、それにしても、なんとなくさんく

さかった。夕方や晩だったら、こういう客がきても、ほとんど注意をひかなかったらう。常連だったら、いつだって、もちろんかまわなかったが。そこで主人は、こいつはきっと客ではなく、なにかの用で、それもあんまり有難くない用できたのだ、とでも早合点したらしかった。それまでこのような人間の咄嗟の心持にすっかり疎遠になっていた西田実には、急にそれに出会って、実際以上にそう感じたのかもしれない。で、かれは、ことさらに、いかにもゆきつけの店にでもきたような歩きぶりで、窓ぎわのテーブルについたのだが、主人はかれの動作をじっと見守っていた。そしていよいよかれが客だと判ってからはじめて、愛想よくはないが、まず平靜な顔付きになり、近づいてきた。あとは何事もなかった。一皿の食物とビールを注文し、出てゆくだけだった。

しかし食事がすんでから、勘定台へいって、西田実が金を支払う段取りになったとき、主人はいきなりこう訊ねてきた。

——あなたはまえにここの二階に泊っていたことがありますか。

でたらめを言っているのちがいがなかった。西田実はこの町へはじめて来たのだったし、それにここの二階が泊れるようになっていたことも知らないのだった。西田実は微笑し、顔を横に振って答えなかった。この身振りは、ひょっとすると、泊ったことがあるのに、そんなことはない、とウソを言っているようにも、とれそうなのだった。というのは、主人は案外、まじめな顔をして、かれの方を見ていたからである。なにか言っておいた方がよ

いようだった。

——ぼく、これから汽車に乗るのですが、停車場へはどうゆくんですか。

主人はうなずいた。

——なあと、停車場へゆくのは、わけありませんよ、この店の前に立っていると、馬車が通りかかりますからね、それを呼びとめて、停車場へゆけといえ、つれてつてくれますよ、それだけのことです。

——そう、どうもありがとうございます。

西田実は主人がレジスターから釣り銭を出すのを待っていた。

主人は太い指輪をはめたひどく太った指で、札を数えながら、その間にまた自然と口をきいていた。

——汽車でどちらへ？

——くにへ帰るんです。

——そうですか、そんなら船でいったらどうです？

これまた西田実は異様にきこえた。かれはくにへ帰るといっただけで、まだ、それがどこにあるかを告げていないのだった。

——船でもいいけれど、どうしてわかるんですか。

——あなたは日本人でしょう？

——そうですとも。

——はらね、日本は島でしょう、結局は船にのるしかないじゃありませんか。

西田実は苦笑した。

——いや、船より、その、途中までも汽車に乗りたいです。——むつかしいですね、と主人が言った。もつとも、あなたが日本人なら、よいかもしれないが。

赤く肥った主人の顔にちらりと皮肉な表情が浮んだ。西田実はそれまで自分が日本人であることを意識したことがなかった。それは自明のことで、かれはそれを一度も考えたことがなかったからである。だから、おまえは日本人だといわれても、それがどうしたんだとばかり、平気な顔をしていたのだが、今は急に特別の意味をもち、わけでもこれからの自分の行動によいにしろわるいにしろ、なんらかの関係があるかのように言われたのである。さつき船をおりてからここへ歩いてくるあいだ、かれはいかにものんきな気持で、なんの心配もなかった。金はあったし、ときどきちらと心に浮んだものといえ、自分の生れた、そして今は、もし無くなっていないとしても、すっかり変貌してしまっているだろう家の、もとの姿くらしいものだった。生れ故郷へかえるということは、そこで自分がすっかり見知らぬ人のように、ひとびとから見られることにすぎなかったろう。かれはそれを漠然とではあったが、予感していた。それでも帰ってみようと思つたのは、要するにそれによって自分を確かめ、それからしてなんらかのコースの転換をもとめようとする気があったからかも知れなかった。ついさっきまでかれは一途に、汽車にのつてその方へ向つてゆくことしか考えていなかったし、それが当面の唯一の目標であったところ、ところが、たまたま、それこそ足の向くままにやってきたこの道

ばたの食堂の中で、それが突然ぐらついていたのである。もしもこの、人がよさそうではあるが、どこか人殺しでもしたことがありそうな、えたいの知れない主人のいうことが本当なら、たとえいまでもなくても、やがてはわかるにちがひなかった。かれを不安ならしめたのはそのことではなく、むしろかれが日本人であるということだった。主人は、日本人ならいとも知れぬ、といったわけで、これはむしろかれを不安ならしめるよりも、安心させて然るべきであつた。が、実際はそうではなかつた。言葉そのものよりも、ほんの少しではあるが、その中にこめられているトゲがちくりとかれをさしたのだった。どちらかといえば、日本人ならだめだろう、といわれた方がまだしもよかつたろう。この場合なら、かれは大いに抗議すればそれでよかつたからである。どうやら西田実が優遇されると居心地のわるくなる種類に属しているらしかつたが、しかしどうして自分が日本人であることからのがれることができようか。

——むつかしい、とあなたはいましたね、どうして汽車にのるのがむつかしいのです、と西田実が少し興奮して、ほとんど喧嘩腰でこう言っていた。

主人はおちついてゐた。かれは観察するように西田実をながめていた。町にちゃんと住みついていて、おそらくは大なる自然的乃至社会的變動でもないかぎり、自分の家を支配している、小なりといえどもこの世界の主である者の優越ぶりを以て、風来坊に臨んでいるようなところがあつた。かれの眼には西田実が、一度

やつてきてそれつきりいなくなつてしまふ水夫たちの一人にすぎなかつたろう。しかし口をひらいたときは、西田実の間には答えないで、またしてもこう言つてゐた。

——どうも、あんたには見覚えがあるようだ。

こんどは、からかつてゐるようであつた。西田実はとりあわなかつた。そしてもうこの店から出てゆくことにした。

——釣りをくれ。

けれども主人はすぐに釣り銭を出そうとせず、それを手でもてあそびながら、さっきの間にかえつてきた。

——あんたは汽車に乗るといつたけれども、今いっても乗れませんよ。

——そんなことはわかつてゐます、しかし発車時刻は停車場へいけばわかりますよ。

——しかし、いきなりいつてもだめですよ、たといあんたが日本人であつてもね、たぶん、あんたのような……

——なるほど、それで、ここに泊つてゆけというのですか、ともう西田実はいらだつて言つた。

——それはあんたの勝手さ。

——じゃ、どうしてぼくが汽車にのれないんです、どうして乗つてはいけないのです？

主人は釣り銭を数えてカウンターの上面においた。しかし今度は西田実が主人の返事を待つていて、それをまだ取ろうとしなかつた。